







# 明治維新の再検討——民衆の眼からみた幕末・維新时期

# 長州を襲う一揆と諸隊脱退騒動

(19)

## III 維新政府と対立する初期農民闘争

### (3) 即時攘夷派と農民一揆の結合を恐れる政府

鳥羽伏見の戦い  
(1868年1月)で始まつた戊辰戦争は、箱館五稜郭の戦いで榎本万年月により、ようやく終了した。だが、戊辰戦争は、諸藩の借金をさらに重くし、また、藩札や廢惡貨幣の大量発行でインフレを招き、諸物価高騰で庶民の生活を極度に悪化させた。

さらに、1869年(明治2)年の飢饉は、東北や関東を中心に全国の人財政は、ますます悪化した。下山三郎著『近代天皇制研究』(岩波書店1976年)によると、1968(明治元)年ころの全国諸藩の借金は、平均で年間収入の約3.4倍にまで増大したと

### (i) 山口藩を大きく揺るがす農民一揆

言われる。借金の増大は、新政府軍の主力となつた「西南雄藩」においても例外で

山口藩に至つては3.6倍にまで至つた」と言わ

なかつた。鹿児島藩は1.8倍、高知藩は2.1倍、佐賀藩は2.3倍、

著「維新と混亂」—「九州の歴史」(著書房1979年 P.155)の1869(明治2)年であった。

6月の版籍奉還で、企救郡は政府直轄の地(日田県の管轄)となつたが、山口藩は撤兵しないで占領を続けた。

その下では、「占領政治につきものの政治の腐敗が起り、大庄屋・庄屋などの地位は金で売買され、村役人は長州藩の役人と結託して年貢を横領するなど不正が横行した。しかもこの年は、前年の凶作で農民は食糧に

敗が起り、大庄屋・庄屋などが小作人であり、農閑期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

### ▼堀込純一

いたのが明らかとなり、農民の怒りが爆発したこ

とにあつた。畔頭の松原吉太郎は、年貢徴集時に、米1俵あたり5合ぐら

も余計に取立てたのである。

岩永村の農民はほとん

どが小作人であり、農閑

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

期には小商いや駄賃稼ぎ(駄馬で物品を運んで運搬を稼ぐ)、さらには日雇いなどでようやく渡世

なかつた。鹿児島藩は1.8倍、高知藩は2.1倍、佐賀藩は2.3倍、

著「維新と混亂」—「九州の歴史」(著書房1979年 P.155)の1869(明治2)年であった。

6月の版籍奉還で、企救郡は政府直轄の地(日田県の管轄)となつたが、山口藩は撤兵しないで占領を続けた。

その後も、前大津部では、俵山村などで不穏な動きがあり、1870(明治3)年1月12日に

は、熊毛郡岩田村の一揆は、俵山村の油屋・太助宅の反撃が始まり、市中は上

で、堪忍袋の緒が切れた。ついで、卯助らは儀三郎に掛け合つたが、いずれ正月に焼き捨てる」と脅し

た。だが、その夜8時ごろから、東方より官側の

反撃が始まり、市中は上

で、堪忍袋の緒が切れた

絵堂と打倒し、もう一手

して進み、大田(おおだ)

にて合流した。

ここにおいて、諸隊申合せの上、

庄屋宅を打ちこわす行動に出ようとした。不穏な

空気が広がり、一揆が起

こりかけたのである。

この動きを聞いた前大津部

に人員を募集した。同年

1月に山口藩振武隊を

駆けつけ、巧みに一揆

に駆けつけ、巧みに一揆

に駆けつけ、巧みに一揆